
思い出

広瀬修二

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思い出

【Nコード】
N1406S

【作者名】
広瀬修二

【あらすじ】
ふるさとで過ごした多感な少年期をエッセイ集にしました。

第1話 「かけっこ」

僕は小学校の6年間を通じて運動会の

「かけっこ」はいつも5着だった。

田舎の小学校で男子は24人、ちょうど6人づつになり、
そして6着も決まっただけで松山君だった。

そんな松山君だが1度だけ「かけっこ」で僕が負けたことがあった。

松山君には「玉拾いのタツ」というアダ名があった。

どうしてそんなアダ名がついたのかというと、

町の海岸沿いにゴルフ場があり、

1番から9番までは平坦なコースなのだが10番から18番は
山あり谷ありで、茂みや木立がたくさんあったりして、
打ち込まれたゴルフボールがわからなくなってしまい、
お客さんも探すのを、すぐあきらめてしまう。

それを探し出すのが松山君はすごくうまい。

タツとは達人のことで、僕たちはどんなことでも

うまければ、メンコなら「メンコのタツ」、

ゴムのパチンコなら「パチンコのタツ」というふうに、
よんでいた。

ある日学校が終わると松山君にさそわれて、

2人で玉拾いにでかけた。

その日は松山君も僕も、ゴルフボールをみつけることができず
僕は諦めかけていた。

そのとき松山君が「あそこに行こう」と言い出した。
あそこというのは17番ホールの中で、コースのと真ん中に
田んぼがある。

いくら田舎のゴルフ場とはいえ、あんまりな話で
ふつつはクリーク（水たまり・池）だともう、

田んぼのまわりには、ネットが少し高めに張ってあるのだが
なにせコースの真ん中にあるのでどうしても
ゴルフボールが飛びこんでしまう。

飛びこんだら最後、ネットの内側にはごていねいにも
鉄条網が張ってあるのでゴルフボールは諦めるしかない。

だけどそこに行けば確実にゴルフボールが拾える、
しかしそこは地主のじいさんが、ときどき見回りに来るので
つかまったら最後、棒でたたかれるのでよっぽどの事が
なければ、だれもよりつかない。

田んぼは、すりばちのようになっていて、
あぜ道の突き当りは壁で、そこだけ鉄条網がとぎれている。

松山君はそのことをよく知っていて、ネットの下のほうを
くぐりぬけて、2人で田んぼに入るとゴルフボールを
探し始めた。

さすが「玉拾いのタツ」の松山君はすぐに2個のゴルフボールを
みつけたした。

田んぼには素足で入る、なにか硬いものがかかるとに当たって僕もようやく見つけることができた。

そのとき突然松山君がバシャバシャと田んぼのなかをかけた。

それと同時に「コラー」と怒鳴り声がひびき田んぼに向かって黒いかたまりのようなものが走って来るのが見えた。

僕はとつさに拾ったゴルフボールを投げ捨て、田んぼの畦にぬいであつた草履をつかむと松山君の後について田んぼの壁をよじ登った。

すぐ近くまで爺さんが迫っていた来ていたので2人は必死になって走った。

前を走る松山君に追いつこうとしたが差が縮まらない、それどころか引き離されていく。

うしろをふりむくともう爺さんは追つてはこなかったが松山君はうしろも振り向かず18番ホールまで駆け抜けていった。

松山君に負けたのはこれ1度きりで、

中学校になると4クラスになり、

松山君とはいっしょに走ることはなかった。

高校は1学年、7クラス、300人のマンモス校で、
、
またもや松山君とは同じクラスにはならなかった。

運動会ではクラス対抗なので足の遅い僕はとうぜん

選ばれることはないと思っていた。

ところが3年生の運動会の時に「高校生活最後だから全員参加」ということになり、

僕は初めてクラス代表の200m走に出場することになった。

どうせビリだろうから、最初だけ勢いよく飛び出して、目立ってやろうと考えた。

そのもくろみはみごとに成功して100mまではトップ集団にいた、カーブに差しかかると応援の声がかきこえてきて、

クラスの女の子が僕の名前をよんでいる、

はじめての経験で「なんかいいもんだ」と思いながら、

ここで1着になったらマンガの世界だが、

現実にはカーブで足が止まり、直線になると次々と抜かれてビリになることを覚悟した。

ゴールしてから後ろをふりかえると誰かが走ってくる、よく見ると松山君だった。

僕は心の中でつぶやいた「わが心の友よ がんばれ！」

第1話 おわり

第2話 「初恋」

僕は小学生のころは背が低くて1年生から3年生までは前から2番目だった。

4年生になると少し背が伸びて4番目になり、朝礼の時に「鳴沢ちさ子」という女の子と並ぶようになった。

フォークダンスでは最初にいつも「ちさ子」と手をつなぐことになり、僕はとってもはずかしくて、モジモジしていると「ハイッ！」といって僕の手をギュッとにぎってきた。

オカッパ頭で、ちょうちんブルマの目がクリツとした女の子で、そんなちよつとした事がきっかけになり、好きになってしまった。

恥ずかしがり家の僕は話かけることもできずにいたのだが、それでも夢にまでみるようになり、6年生まで片思いはつづいた。

中学生になるとクラスが4つにふえて1度も同じクラスにはならなかったので、除々に思いも薄らいでいった。

中学校の卒業を前にして小学校の時から同級生だけのお別れ会にさそわれたのでいってみると、参加したのは12人と少なかったのだが、その中に「ちさ子」がいた。

ソフトボールをしたり、お菓子を食べたりしたあとで、

フォークダンスを踊ることになって、ひさしぶりに「ちさ子」と手をつなぐとあの時の思いがよみがえってきて、僕は思いきって「卒業したらどこへ行くの？」と声をかけた。

進学するならほとんどの人が地元で1つしかない県立高校に行くので、《同じ高校ならいいなあ》と思っていたのだが、「看護学校に行くの」と期待はずれの返事がかえってきた。

《もう会えないのか残念だなあ》と思っていたのだが、高校生になって朝、通学するバスに乗ると、1つ先のバス停から「ちさ子」が乗ってきた。

僕が通う高校までは1時間くらいかかるのだが、その中間ぐらいいのところに県立病院があり、その看護学校に通っていたのだった。

話かけたかったのだが、あいかわらず恥ずかしがり家の僕は、人目が気になってできずに、たまたま目があうこともあったが、お互い小さくうなずくていどだった。

2年生になり、16歳の誕生日がくると

僕はかねてからの念願だったオートバイの免許をとった。

その年の暮れに友達から郵便配達のアルバイトの話が来て、大好きなオートバイに乗ってできる仕事なので、喜んで引き受けることにした。

そして迎えた正月、朝6時に郵便局をスタート、1つの地域を友人と2手に別れて配達するのだが、

僕の配るコースには「ちさ子」の家が入っていた。

元旦はほとんどの家に配達するので「ちさ子」の家が近づいてくるとドキドキと胸が高鳴った。

家の前にオートバイを止め、玄関に向かうとガラス越しにうつすらと人影がみえた。

普通は郵便受けに年賀状を入れたらすぐ次の家に向かうのだがもしかしてと思った僕は、玄関の戸を開けてしまった。

そこにはパジャマ姿の「ちさ子」がたっていた。

まさか戸を開けるとは思っていなかったのだろう
驚いたようすで、僕をみた「ちさ子」の
すこし恥ずかしそうなしぐさが、とても愛しく思えた。

僕は「年賀状」とだけ告げるとその場をはなれた。
あとからどんどん嬉しさがこみ上げてきて、
今年はなんかいい年になりそうな気がしてきた。

そんなことがあってすぐ3学期がはじまって、
いつもの学校からの帰りだった。

近くのバスセンターからバスが出るので
帰宅部の僕はいつも席に座ることができた。

その日「ちさ子」は病院前からバスに乗ってきて、
僕の近くにきたのですかさず「カバンもってやるよ」と
声をかけると「いいよ」と断られたのだが、

奪い取るようにして僕のカバンの上に重ねた。

あの時くらい僕は自分でも驚くほど積極的になっていて、その後はいつでも声をかけられるようになっていた。

そしてこの楽しい時間はいつまでも続くんだと

思っていたのだが、3年生になって新学期がはじまると

「ちさ子」はバスに乗ってこなくなった。

あとでわかった事だけど看護学校は2年制で、

すでに「ちさ子」はN市の病院に勤めにでていたのだった。

けっきょく「ちさ子」とはそれっきりになってしまった。

それから15年後、僕はI市を中心にセールの仕事をしていたのですが、となりのM市まで足をのばした時のことです。

とある1軒の住宅に立ち寄り、チャイムを鳴らすと見るからにおばさんという感じの女の人が出てきたのですが、なんとなく面影があつたので表札をたしかめると

「瀬古ちさ子」という名前があつた。

《まちがない》と思った僕は「鳴沢さんだよね？」というと警戒するような表情になったので「ほら小学校の同級生の広瀬修二だよ」やっと気がつき安心したのか、昔話にはなをさかせた。

N市で出会った旦那さんの故郷のM市にきて子供も2人いるとのことだった。

昔から美しい思いでは、心の奥にしまっておくものだというけど、

僕は「ちさ子」が初恋のひとだったことは一生だまっておこうと
かたく心にきめて「ちさ子」の家をあとにした。

第2話 おわり

第3話 「屋根裏部屋」

僕が生まれた育った家の二階には二つの部屋があつて、そこは木の枠組みがむき出しの屋根裏部屋で、窓からは海がよく見え波の音や潮の香りがして僕はたいそう気に入っていた。

兄と姉が中学校を卒業すると神奈川県の叔母のところについてしまったので僕だけの部屋になった。

その部屋の本棚には世界文学全集が全巻そろつていてむさぼるようによんだものだ。

2階に上る階段はみかん箱を少し小さくしたくらいの頑丈な箱でふたを開けるとたくさんの道具が一つ一つていねいに油紙に包まれていてその箱が重ねられて階段はできていた

その階段を上りきった所に部屋があるのだがとなりにもう一つ物置部屋があつてそっちのほうは入り口には戸がないので部屋を仕切っている真ん中の柱に捕まりながら足をかけて勢いをつけないと中に入ることができなかった。

そこは窓もなく電気もきていなくて昼間でも薄暗い部屋にはいろんなものが雑然とおかれていた。

僕の父は東京生まれなのだが、たまたま軍隊でこの地に来てきていて終戦をむかえると何を思ったのかこの町に住み着いてしまった。

祖父は東京で工場を経営していたのだが空襲で焼け出され
僕の叔母に当たる娘の嫁ぎ先に疎開していた。

いっぽう父は地主だった僕の母方の祖父にとっても気に入られて
田畑のほかに家一軒までも建ててもらい東京の祖父と祖母を
こちらに呼び寄せた。

祖父は東京での再建を考えていたそうだが跡取り息子が田舎に
家をかまえてしまったのでしかたなく引っ越してきたのだった。

その2階の荷物は祖父が持ってきたものだが
子供のころの僕にとってはドラえもんのポケットに
入り込んだみたいでワクワクしながらいろんなものを
持ち出してはよくしかられたものだ。

小学校のときなどは理科の実験で、

先生から必要なものを家から持ってきてと

いわれると何でも持っていたので

友達から「なんでも屋」というあだ名までつけられてしまった。

今でも僕はこの宝箱のような部屋を心の中に持っているので
いつでも取り出すことができる。

第3話 おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406s/>

思い出

2011年10月8日23時28分発行